

松本清張全集 8

松本清張全集

8

文藝春秋

松本清張全集 8

草の陰刻

定価 1400円

1972年 5月20日第1刷 1978年 4月15日第4刷

著 者 © 松 本 清 張

発行者 樫 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町 3

電話(代表)03-265・1211

印刷所 凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替えます

草の陰刻

3

解説 見田宗介

435

装帧 伊藤 憲治

草の陰刻

第一章

季節にしては少し冷えすぎる五月十六日の夜のことである。

松山地方檢察庁杉江支部の宿直員は檢察事務官と事務員の二人だが、当夜は、事務官が平田健吉、四十歳、事務員が竹内平造という三十一歳の男だった。庁舎は松山地方裁判所杉江支所に隣合っている。この市は四国の西海岸に以前から漁港として栄え、現在、人口十五万をかかえていた。もともと城下町である。

庁舎は二階の無い小学校の建物を連想させた。玄関を入った正面が事務室、その隣が検事室となっている。この恰好も小学校の教員室や校長室と似通っていた。検事の公舎は庁舎の裏側にあった。

その晩八時ごろ、二人は懐中電灯を照らして庁内を一巡し、事務室に戻った。事務室では残業の若い事務員が七時まで指を真黒にして謄写版を刷っていたが、そのあとは誰も居なくなっている。

宿直は事務官と事務員とが一週間に一度の割合で回り持ちになっていた。この支部は検事一人、事務官八人、事務員七人で構成されている。

一回目の見回りを終えた二人は、湯呑場で茶を淹れて飲んでいた。

「どうも気候不順じゃな。わたしは神経痛の気味があるけん、こないな気候が一ばん苦手なんじゃ」

と、平田健吉が竹内平造に言った。

遠くで船の汽笛が鳴っている。

「将棋でもさししましょうか？」

と、竹内が言った。

「そうだな、将棋もええが」

と、平田はあまり気乗りのしない顔だった。竹内は平田が将棋好きなのを知っているので、すぐに応じてくるかと思っただが、あまり弾まない顔つきだったので、今夜はその神経痛がこたえているのかなと思った。二人とも土地の人間である。

しかし、将棋を断わった平田はそのあとでこう言いだした。

「どうも身体の調子が悪うていけんから、外に出て一杯ひっかけてこよう。君、よろしく頼むよ」

宿直員が無断で外出するのはむろん規律違反である。しかし、二人が交替で、ちょっと外で一杯ひっかけてくるくらいは黙認されていた。外出者が留守番の宿直員に酒を買って戻ったりすることがある。

竹内は事務官の平田が酒好きなのを知っているの、神經痛のことも外出の理由かとも察して、

「じゃ、行つてらっしゃい。一時間ぐらいならいいですよ」と答えた。事務員は事務官に対してやはり遠慮していた。「この次の見回りは十二時だからな。その間に身体の中を温めておこう」

平田は壁にかかった電氣時計を見上げた。針は八時二十分のところに近づいていた。

平田事務官が出て行つたあと、竹内事務員はぼつんと残つて所在なげに週刊誌などを拾ひ読みしていた。

庁舎は町の中心から外れているので、夜は静まり返っている。外は小雨が降つたりやんだりしていた。汽笛がしきりに聞こえた。こういう晩は、沖に霧がかかる。

竹内も酒が嫌いなほうではない。平田が戻れば、一合ぐらいの酒とおでんが土産にくるかもしれない。平田の菓は大体分っている。この杉江市の大通りから入った横丁が飲み屋の並んだ所になっている。バー、すし屋、おでん屋、大衆食堂などが集まっている。その中に彼らの間で赤提灯と呼んでいる「たから屋」が平田の行きつけだった。おかみは肥った女で商売上手であつた。

二十分ばかりして電話のベルが鳴つた。竹内が受話器を取ると、平田の声で、

「いま、たから屋に来とるが、どうだな、君もちょっとここに飲みにこんか？」

と誘つた。宿直員が二人いっしょに出るのはもちろん許されることではない。竹内がそう言つて断わると、「いま、面白い話が始まつとる。なに、十分や二十分、そこをあけても大したことはないよ。君が来たら、ぼくもいっしょにすぐ帰るけん」と

と、平田はしきりに勧めた。

「けど、ぼくが出ればあとが空っぽになりますからね。不用心ですけん」

竹内は答えた。

「不用心だといつても盗られるものは何も無いし、警察から電話がかかってくることもあるまい。このところ、ずっと泰平無事じゃけん」

平田はそう言つた。

地檢支部に泥棒が入つても盗まれる金目のものは何も無い。盗んでも仕方のない品物ばかりだ。それよりも宿直員二人とも外出して困るのは、警察署から夜中に事件の連絡電話がかかってくるからだ。よほど大きな事件でない限り検事に直接報告はしないが、それでも一応は当直の事務官に連絡はある。地檢支部の当直事務官はそれを受け付けておいて、翌朝検事に一切を報告することになっている。

ところが、平田も言う通り、この二、三カ月は警察署から一度もそのような電話はかかってこなかった。尤も港町として栄えているのでよそ者も相当に多い。船員も漁夫も上陸する。そのため喧嘩や刃傷沙汰も無いではなかったが、年間の統計が示す通りに件数は少なかった。旧い町の良風のせいかもしれない。

殊に、最近はずっと平穩がつづいているので、今晚三十分くらいは庁舎をあけても大丈夫だというのが電話の平田の言いぶんだった。

竹内も泥棒の心配よりは警察署からの連絡電話のほうが気がかりだったのだ。殊にすぐ裏には検事の公舎もある。

バレたときには責任問題にもなりかねないが、平田があまり勤めるので、まあ二、三十分くらいなら、と承知して受話器を切った。

竹内事務員は入念に煙草の火を灰皿にもみ消した。

竹内平造は、赤提灯の出ている飲み屋の格子戸をあけた。

「おいでなさい」

と、目ざとく見つけた真正面のおかみが愛想笑いをして声をかけた。客はかなり混んでいる。平田事務官は隅のほうに腰をかけて酒を飲んでいた。彼は竹内の顔を見てニヤリと笑った。宿直を脱げてきたうしろめたさと快感とが、そのうす笑いに含まれていた。竹内は平田の隣の椅子にか

けた。平田は皿におでんのゆで卵と串刺しのイモを置いている。

「コップで貰おか」

と、竹内はおかみに注文し、

「ここをなるべく早く引揚げましょうや」

と、平田に言った。

「まあ、そうあわてることはない」

と、平田はもう酒臭い息をさせて笑っていた。彼の前にもコップの酒が半分になっていた。

「だけど、万一ということがありますからね。えてして、こんな晩に警察から電話のかかってくるような事故が起らぬとも限りませんよ」

竹内はまだ落着かなかった。

「なに、そんなことは起りやせんよ。ずっと何もないできたのじゃけん。それに、僅か三十分ぐらいあけたところで大したことはない。まあ、そんなことを考えずにゆっくりいっしょに飲もうわい」

と、平田は誘い込むように竹内の背中を叩いた。

竹内の前にもコップ酒とおでんの皿が並べられた。彼は平田と乾杯のような恰好をし、酒に口をつけた。当直を脱げてきたせいか酒の味もうまかった。

居合わせた客は四、五人だったが、みんな船員風の男た

ちだった。この漁船の船員たちは大声で話し合っている。

「お互い、うだつの上らない身分じゃけんな」

と、事務官がコップを抱えて言った。

「一生、このままで出世の見込みもない。まあ、のんびりとやろうや」

平田は身分の絶望を言っている。だが、竹内からすると、平田より下級だ。その点、事務官の平田のほうがまだ恵まれているといつてよい。竹内としては平田がなんだか逆な言い方で自分が事務官であるのを自慢しているように思えたので、少し気に障った。

「出世なんかどうでもええですよ」

と、彼は酒を口に注いで言った。

「わたしから見れば、あんたはまだ位が一段上だからね。まだええほうですよ」

「なに、君はそんなことを言うが、事務官だって大した違いはない。上のほうの検事さんからみれば小使同様なんじゃない。やっぱり子供は学校を出してやらないかんと思うが、この薄給ではそれもできないしね。まあ、せいぜい酒を飲んで楽しむぐらいだな」

「そりゃばくだつて同じことですよ。いま上の男の子がやつと三年生だが、将来大学などとてもやれませぬね」

「大学でも、この辺の田舎の大学を出したところで役に立

たん。役人にするなら、やっぱり東京じゃかな」

と、平田がイモを頬張って言った。

以下は事務員竹内平造の供述である。

——竹内は平田事務官と「たから屋」でしばらく飲んだ。はじめ二十分くらいのつもりが、少し長くなった。平田の言い方に少し癪に障ったところもあり、もともと酒が嫌いなほうではないので、ついビッチが上った。

時計を見ると、三十分以上経っている。竹内があわてて切り上げようとしたが、平田がもう二、三十分は大丈夫だと引止めた。

「なに、警察から連絡がくるはずはない。わしらが一時間くらいここに居ても大丈夫じゃ」

と、平田もかなり酔った声で言った。

竹内も上級者の平田がそう言うので、ついその気になり、またコップ酒を飲んだ。それから少し記憶が分らなくなってきた。

おぼえているのは、彼と先客の漁船の船員風の男たちと口喧嘩がはじまったことだ。船員の一人がビール瓶を掴んで起ち上った。竹内は少し怖くなって一人で逃げ出した。そのとき平田が横から消極的に仲裁したようだが、よくおぼえていない。

竹内は「たから屋」から逃げたが、そのまま検察庁支部には向かわずに別なバーに入った。彼は、役所の迷惑を考え真直ぐ役所に帰らないほうがいいと、そのときは考えたのだ。バーの名前はよくおぼえていない。

すると、そこはほかに客もなく、四、五人の女給がいた。彼は、自分が船員と喧嘩したとき平田があまり加勢もしなかったことを考えて少し腹が立った。そのバーでかなり飲んだのは、役所のほうにはすでに平田が帰っていると思いこんで安心したのと、うっかり表へ出るとまた喧嘩相手の船員と出遇いそうな気がしたからである。

そのうち酔ってわけが分らなくなった。

車に女たちと一緒に乗ったのがもうろうとした意識の底に残っている。かなり淋しい道を走って、また別な町に出た。そのときはすでに午前一時近くになっていた。

どこだか正体の分らない旅館に上った。女たちもその座敷に坐つてビールをとってくれとせがむので、勝手にビールを運ばせた。自分も二本ぐらい飲んだようにおぼえている。それからあとはぐっすりと睡っておぼえがなかった。

眼をさましたのが朝の九時ごろで、その家の女中に起きたのである。ここはどこだと訊くと、小洲の町だと言ったので、びっくりした。

杉江の町から小洲までは約四十キロくらいある。その間

に山を一つ越す夜昼峠というのがある。

いつの間にかこんな町に來たのか。小洲も二万石の城下町で、この地方ではかなり賑わっている。自分の居る所は「柳家」という旅館だと聞かされた。

昨夜の記憶をまとめようとしたが、「たから屋」で喧嘩になったことや、どこかのバーに逃げ込んだことくらいで、全部が正確に思い出せない。たしかにここまでは女たちと一緒にだったか、と女中に訊くと、その人たちは、お客さんがあんまり酔っておいでになるので朝の九時ごろまで寝かせてあげてくれと言って今朝七時ごろに引きあげられました、と答えた。

竹内平造は旅館の女中の話を聞いて昨夜の出来事を思い出そうとしたが、どうも記憶に蘇よみがえってこない。バーの女たちとここに來たことくらいがうろおぼえに分っている程度で、よほど酔っていたらしい。自分の醜態が恥ずかしくなった。

そこで宿泊代を払ったが、女たちの勘定は自分たちで済ましているということだった。妙な気がした。しかし何よりも気になるのは、自分が宿直の身で一夜を外泊したということだ。平田事務官はさぞ怒っているに違いない。彼から先に誘われたとはいえ、まことに面目ない次第である。

竹内は宿を早々に出て、バスに乗った。小洲の町から杉

江に戻るには山路を越さねばならぬ。途中の夜昼峠は立木が鬱蒼として日中でもうす暗い。よくこんな所を昨夜の女たちが車に乗せて自分を運んだものだと思った。

考えてみると、女たちは、彼が金を持っていると思い、小洲の町に連れ出して飲み直すつもりだったかもしれない。ところが、彼があまりに酔っているのと、案外金が無いのを知って、仕方なしにあの旅館で一夜を明かしたのではあるまいか。これが女ひとりだと彼と二人きりだからまだ面白いが、女たち四人では初めから彼をカモにするつもりだったと分る。しかし、女たちが自分らの勘定をして行ったのは、どういう次第だろう。

明るい朝の陽射しが彼の後悔をさらに深めた。地検支部に帰ったら、どう言訳しようか。まさか酔っ払って小洲くんだりまで女たちと一緒にいったなどとは言えない。そこは共同責任者の平田事務官が何とか取りつくろってくれていると思うが、その言訳にも、彼と先に会って口裏を合わせておかなければならなかった。

憂鬱なことである。もし問題が表面化すれば、責任を問われて処分になるかもしれない。忽ち女房、子のことが浮んでくる。検事の瀬川良一は年が若いだけに規律にはうるさいほうだ。

竹内は重い心に怯えを抱きながら、地検支部近くの通り

でバスを降りた。

いつになく道をそろそろと人が歩いているのに気がついた。変だと思って支部のほうに近づくと、人の歩きが余計にふえている。何かあったらしい。その人たちはちょうどその見物でも済ませて帰るような表情を持っていた。

竹内は不安な予感をおぼえてその一人をつかまえて訊いた。

「昨夜、地検の建物が火事で焼けたんですよ」

竹内は仰天した。

その一語を聞いてから彼の心は平衡を失ったらしい。半ば茫然として地検支部の近くまでくると、焦げ臭い匂いが鼻に漂ってきた。人の群れがまだ蒼い煙をとり巻いている。昨日まで存在していた建物が消えて、枝を焼かれたボブラの樹が寂しそうに空間に聳えていた。黒焦げの焼け跡には消防署員がうろうろしていた。

竹内が人垣のうしろからのぞいていると、

「やあ、えらいことになりましたな」

と声をかける者がいた。

竹内はどきりとなって振返った。

そこにはふだん出入りしている町の印刷屋のおやじが、さも殊勝そうな顔で立っていた。

「竹内さん、えらいことになりましたな」

彼は早速火事の見舞を言った。

「はあ、どうも……」

竹内は咄嗟にそんな声しか出なかったが、この火事の重大な責任者は自分だと思つと、日ごろ頭をべこべこ下げて事務室に入ってくる印刷屋のおやじまで怖ろしくなつた。

「全く夢のようですな。まさか昨日伺つた建物が一晚でこんなことになるとは思ひませなんだ。さぞみなさんは大変でしょうな」

「はあ」

印刷屋の話の様子ではまだ竹内が当の宿直だつたことを知らないらしい。

「でも倉庫と宿直室が焼けただけで終わったのは何よりですわい」

なるほど、木造建築の三分の一は灰になっているが、残りの三分の二は健在であつた。焼け残つた建物も、黒くなつていた。

焼け落ちたのは倉庫と宿直室だつたのと、竹内も初めて気がついた。倉庫には事件関係の夥しい書類が収められている。もっとも、新しいのは別な棟に入れてあるので無事だつた。古い事件の書類だけが焼けたのは幸いだつたと思つた。現在の仕事には支障がないはずである。

少し安心すると、落着いて火事の様子を訊いてみたくな

る。實際は地検支部の誰かに会わなければならないのだが、その前に早く事実を知つておきたい。

「昨夜、何時ごろ火が出たんじゃい？」

と、竹内は他人ごとのように訊いた。

「サイレンが鳴つたのが夜中の十二時過ぎじゃつた。それで、わしもびっくりして駆けつけたんですが、消防車がきて火勢が衰えたのは三十分ぐらいのちでしかたないな」

印刷屋のおやじは話した。

「こいでも少し早く消防車がくると、平田さんも気の毒なことになるくてよかつたんじゃがな。そう言うてはなんじゃが、建物が古い木造じゃけん火の回りが早かつたんじやのもし」

平田が気の毒なことになった、と聞いて竹内は息をのんで耳を立てた。

「平田さんが……」

彼は大きく眼をむいて訊いた。

「平田さんがどうかしたんか？」

「あれっ、まだ知つたらんのか？」

と、印刷屋のおやじのほうがびっくりしたが、

「そうですか。もっとも、このどきくさでまだわしも檢察庁の人にお会い出来んで見舞も言えんようなぐわいです。

……平田さんは、この火事で亡くなつたぞなもし」

「死んだ？」

「そうじゃ、宿直室で焼け死んだんですわい」

竹内は仰天した。

平田が焼死した。——信じられないことだ。が、印刷屋のおやじがはつきりそう言うからには間違いないようだ。

竹内は怖くなって、こそそこそこから逃げ出した。

平田が焼け死んだ、平田が焼け死んだ。——印刷屋の声が竹内事務員の頭の中を雷鳴のように駆けめぐった。

平田はあれから「たから屋」を出て真直ぐに宿直に戻ったのだろう。そして、酔って熟睡していたため出火に気づかず、窒息のまま火に焼かれたに違いない。

竹内は現在の自分の立場に恐怖した。彼は顔をかくして、夢中で別の方角へ走るように歩いた。

印刷屋のおやじはまだ地検の誰にも会っていないというから実際のところは知らないようだが、いま竹内自身は上司に搜索されているに違いない。昨夜八時過ぎから当直を脱け出したままなのだ。

飲んでいるとき、あれほど心配した警察署からの電話連絡はなかった代りに、それよりも遙かに重大な事故をひき起したのだ。しかも、当直の平田は焼け死んでいる。——どうしたものか。

はじめは謝って地検支部に帰ればよいと思っていた竹内

も、こうなるとまるで自分が犯罪人のように思われてきた。忽ち瀬川検事の顔が浮んでくる。この三十一歳の検事は、去年の秋に松山地方検察庁からこの杉江支部に転任したばかりだった。小さな支部だから検事は一人しかない。日ごろ規律のやかましい代りに、青年らしく無邪気なところもある。将棋が好きで、自分も何度が相手をした。王手をかけられて、よく待ったを頼む人だった。

だが、竹内は、その青年検事が今では一人の怖ろしい鬼検事に見えていた。のみならず、今まで勤めていたわが家のような地検支部までが、俄かに冷厳な権力の座に映った。竹内事務員は、検事の少ないこの支部では調書作成の手伝いのようなことをやらされていた。取調べ自体は許されないが、彼はいつの間にか、被疑者、被告たちに対して自分自身が権力を持っているような意識になっていた。

それには相手側の態度も影響している。彼らは一事務員にすぎない竹内を恰も検察官か警察官のように怖れ、頭を垂れるのである。

そこに権力を任されている側の——竹内事務員の場合は事實はそうではなかったが、彼がその建物の中で働いているというだけで、そう錯覚する権力意識が働いていた。被疑者や被告は検事の前に阿諛、迎合、哀訴、憐憫を乞うが、事務員の竹内にもほとんど同じような態度を見せる。その

卑屈さがときとして、取調べ側（実際は竹内はそうではなかったが、補助的な仕事をするだけでも、同等な意識に陥るものだ）に耐えられない苛立たしさを起すことがある。卑屈な相手への反撥でどなることもあった。

竹内はいま自分がその被疑者の立場に逆に一挙に転落したかと思うと、惑乱してきた。捕えられたら、彼はかつての上司や同僚の前に公務放棄と出火責任の罪で調べを受ける。まる一晚所在不明になっているのだから、悪くすると平田事務官焼死の責任までかぶることになる。

今ごろは瀬川検事が事務官たちに命じて自分の行方を追及させているかと思うと、竹内は分別を喪失した。手も脚も感覚を失ったように痺れてくる。

竹内は一刻も早くこの杉江の町から逃げ出す気持になった。

あとで考えて、どういう心理でそうなったかがよく分らない。逃げれば、それだけ自分の嫌疑が深くなることは分りきっているのに、そのときはただ捕えられることだけが怖ろしかった。平田の焼死が彼を狂わせた。

彼はふらふらとバスに乗った。走り出して気がついてみると、それは鉄道に並行して走っている道路を北に向っているのだった。終点は町外れであった。

幸いバスの客で彼に気がついていない者はなかった。見知

っている顔はあったが、まさかこの人が地検の火事の責任から逃走している人間だとは察していない。彼が地検支部の事務員とは分っているても、火災の後始末でどこかに連絡に行くぐらいにしか思っていないだろう。

竹内は終点で降りた。そこは小さな駅の前であった。彼はぼんやりと構内に入り、出札口で八幡浜行の切符を買った。どういうわけで八幡浜行の切符を買ったか、それも分らない。とにかく松山までは遠いし、殊にそこには地方檢察庁がある。無意識にそんなことが頭に浮んで途中の町の名を思いついたのであろう。

八幡浜までは汽車で一時間と少しだ。

彼はまた夢遊病者のようにホームから駅の前に迷い出た。この町は彼も何度となく来ているからよく分っている。だが、知人も友人も居ない。

やや空腹をおぼえた。大衆食堂に入とうどんをとったが、味も何もなく半分残した。腹が減っているのに食欲が全然ないのである。

そこを出て賑やかな通りを目的もなく歩いていると映画館があった。ふらふらとそこに入った。

小屋の中はほとんど客が入ってなかった。彼の坐っている椅子の列もがら空きだった。映画は時代ものが一つと現代ものが一つで、どちらも面白くなかった。もっとも、面

白がるにも筋そのものが頭に入らない。大きくのしかかっているのは現在の自分の哀れな立場だけだった。

今から思い出してみると、昨夜からの出来事がまるで悪夢のつづきのようなのである。だが、一方では、こうして坐って映画を見ている現在が、昨夜の事件とはまるきり離れたもののように思えてくる。

——もしそうだったら、どんなにありがたいか分らない。真実、そう思った。昨夜と、現在とがまるきり連続のないことだったら、どんなに助かるかしない。

ほとんど無我夢中のなかで二本とも見終った。外に出ると夕方になっていた。商店にはもう灯がついている。空が次第に昏れかけ、西のほうに夕雲が片寄っていた。

それを見ると、竹内は急に家が悲しくなってきた。家族に会いたかった。

彼は再び駅に引返し、次に来た下りの列車で、杉江のほうに戻った。

暗い路を扶^{たす}んで家の玄関をあけると、妻と何か話をしていた二人づれの男が起^たってきて彼を迎えた。それが地検の同僚だった。

五月十六日夜の松山地検杉江支部の出火について、当地検と所轄杉江署とが協力して原因の糾明^{きうめい}につとめた。

消防署の判断によると、出火場所は第二倉庫と呼ばれている東側建物の近くである。そこは裁判記録などの古い書類が十坪ばかりの建物の中に仕舞い込まれている。第二倉庫というのは現在必要のない過去のものを入れてるところからきた呼び名で、最近の裁判関係の書類は反対側の狭い倉庫に入れてある。

こういう場所だからもとより火の気はない。季節も五月の半ばだから、宿直室でも火鉢を使用していない。

ただ、檢察庁に放火があったというのでは問題が重大になってくる。原因の発表を急いでできない理由がそこにあった。

火は、その第二倉庫を夥^{おびただ}しい書類と共に一なめして廊下を焼き、宿直室になっている八畳の部屋を全焼させ、その隣の取調室で止まっている。

元来が古い木造なので、折から小雨の降ったあとではあったが、火の燃えは意外に早かった。ちょうど庁舎の裏に検事の公舎があったが、瀬川良一検事が赤い炎に気がついて飛び出したときは手のつけられない状態だった。

瀬川は去年の秋に着任したばかりで、まだ独身だった。

炊事や身の周りの世話をするばあやは、朝七時ごろに来て、普通は夕食の支度をする^{しやど}と帰ってしまう。元来が家族と共に住めるようになって^{なつて}いる公舎だから、彼ひとりでは